

新中国に貢献した日本人たち

—「留用」の史実の全貌

日本国際貿易促進協会相談役 武吉次朗



まず自己紹介をいたします。私は1945年の敗戦時、両親や姉たちと中国・ハルビンに住む中学1年生でした（私は戦後、ソ連兵の略奪暴行を何度も体験し、敗戦の辛さが身に染みているので、「終戦」というあいまいな言葉は大嫌いで絶対に使いません）。翌年、進駐してきた東北民

主連軍により姉婿が留用（中国語で、一時留めて任用すること）されたので、いろいろいきさつがありました。結局一家そろって残留し、1946年10月、14歳のとき、黒竜江省の密山で兵器工場の立ち上げに見習工として参加、翌年から駝腰子という所にある砂金鉱山で働き

（このころ両親が死去）その後、

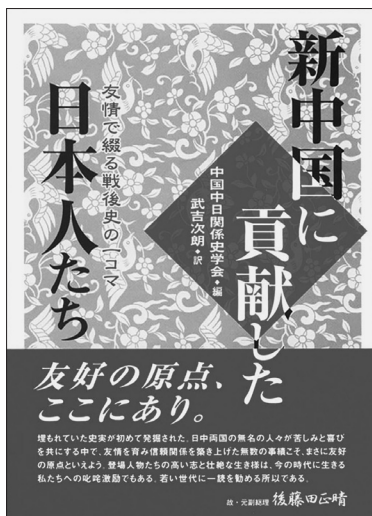
瀋陽の東北有色（非鉄）金属管理局に転任となり勤務しました。「留用」で働いた日本人の中では、私がいちばん年少だったと言えます。

1. 「留用」の背景と経緯

日本の敗戦後、中国共産党は東北地区（旧満州）をきわめて重視

しました。東北には豊かな資源と近代的工業がある上、背後にソ連が控えていたからです。このため、東北に近い華北と山東省から10万の八路軍を送りこむとともに、当時77人いた共産党の中央委員と同候補のうち20人を東北へ派遣しました。ただ、国民党政府と取り決めがあるソ連の立場に配慮して、軍隊は「東北民主連軍」と呼称しました。人民解放軍第四野戦軍の前身です。他方、国民党も西南の奥地から米国が提供した輸送機と軍艦で精鋭部隊を東北へ送りました。こうして、1946年春にソ連軍が撤退した後、東北を争奪する国共内戦が不可避になりました。

そのころ東北には100万余の日本人がいましたが、当初は国共双方も米国も、



中国中日関係史学会がまとめた留用日本人の事績記録の日本語版『新中国に貢献した日本人たち』（武吉次朗訳、日本橋報社、2005年刊）

全部日本へ送還する方針でした。ところが国民党支配地区では、鞍山の製鉄所など多くの分野で日本人専門家の協力が不可欠であることが判明したため、特別の規則を作った。「留用」させることになりました。都市ガスの専門家だった私の母方の叔父も、瀋陽で国民党政府により「留用」されました。このような状況を見て、共産党側も必要な要員を「留用」させることにしたのです。

東北にいたこれ以外の日本人は、1946年に葫蘆島からすべて引き揚げました。共産党支配地区にいた20余万の日本人も、同年6月から10月までの国共両軍による休戦期間を利用して引き揚げられました。国共双方は「日本人の引き揚げ」に関しては順調に協力しあったわけでは

2. 共産党による「留用」の分野と規模

人数については、正確なデータが何処



1952年10月1日天水～蘭州間の鉄道が開通し、一番列車の機関車を囲む日中の関係者（天水会提供）

にもないので、あくまで推測になります。まず医師・看護師など医療関連の要員です。東北に進駐した八路軍10万人のうち、医療関係者は16000人しかいませんでした。これではとても足りないもので、日本人の医療要員3000人のほか、補助・雑役として2000人を残しました。軍隊の担架隊員（戦場で担架を持って待機し、負傷者が出たら後送する要員）とトラック・ジープの運転手が10000人（担架隊員の多くは「元満蒙開拓青少年義勇隊員」でした）。

工場・鉱山・鉄道の技術者と現場作業員が60000人。工場には、鉄鋼・非鉄金属・機械電器・化学・製紙などの業種がありましたし、鉱山には、重要なエネルギー源だった石炭の産地「鶴岡」で働いた18000人が含まれます。現場をたばねる業種ごとの管理局にも、日本人の技術専門家がいました。

その他、中国空軍の創設に協力した元

関東軍第4錬成飛行隊（通称・林部隊）の3000人、映画制作所（旧満映）の1000人、研究所の科学者、縫製工場の技師と熟練工、等々がありました。以上で合計1万数千千人、家族を含めると2万数千千人、という規模になります。

3. 「留用」の方式

これは地域と時期によりさまざまですが、私なりに分類してみると、下記の7種類がありました。

①組織ぐるみ。関東軍や満鉄の病院で勤務していた医師・看護師たちが、病院ごとまるまる「留用」されたケースが結構ありました。また前述の「林部隊」も組織ぐるみの一例といえます。私が最初に働いた兵器工場には、新潟から「満州」に移った機械工場の技師と熟練工がそっくり「留用」されていたので、現場では新潟弁が飛び交っていました。

②中国側による指名。引き揚げを控えた日本人に履歴書を書かせて、必要な技術者をピックアップし「留用」させました。日本人は律義なので、隠したりせずちゃんと本当のことを書くのですね。私の姉婿もこのケースでした。

③日本側による指名。旧満鉄中央試験

所の丸沢常哉所長が贖罪意識から責任を感じて、「オレはこの資料と資材をすべて中国側に引き渡すため残るから、キミも残って協力してほしい」と部下に頼んだケースがありました。

④ 割り当て。「この地域で何人」という方式も、まれにあったようです。女学生が見習看護師として割り当てに応じたのは、やはり解放軍の規律が厳正で態度が穏やかだったからで、もしソ連軍から言われたのなら、死んでも拒否したと思います。

⑤ 「寄る辺なし」から。二元義勇隊員が、仕事がないまま栄養失調で寝込んでいたところを救われ、「わが軍に来れば腹いっぱい食べられるし、病気も治療できる」と言われて、そのまま参加しています。

⑥ 国民党による「留用者」が、そのまま共産党により「留用」された例が、前述の鞍山製鉄所の技術者230人や、長春の元大陸科学院の科学者などです。

⑦ 思想信条から進んで残った人もいましたが、私の知るかぎり、ごく個別のケースだったと思います。

4. 初期の状況と中国の対応

「留用」の大半が不本意ながら残され

た人たちでしたから、当初は不満をもつ人が大多数でした。「早く日本へ帰りたい」「でも、戦争に負けたのだから仕方がない」というのが、共通の心情でした。しかし日本人特有の「職人気質」から、工場でも病院でも、与えられた仕事は決して怠けず手抜きせず、細心丁寧にやりとげ、中国の上司や同僚、患者たちに深い印象を与えたのです。国防大学の徐焯教授は著書『1945年 満州進軍』にこう書いています。「筆者の両親もその同僚たちも、

東北で日本人医療関係者から治療と手当を受けたが、彼らは口々に絶賛し、『一人ひとりがベチューン（日中戦争中、八路軍の野戦病院で献身的に働いたカナダ人外科医師。破傷風に感染し死去後、毛沢東が追悼文



解放軍に参加した日本人たちにも授与された各地の解放記念章、左から東北、華北、華中解放記念章。右は解放奨章
 『新中国に貢献した日本人たち』日本僑報社刊より転載

を書いた)のようだった」と評価する。看護師は仕事が割り当てられると『はい』と一声で応じ、いいかげんなどころ一つなく、中国人同僚に深い印象を与えた。私が最初に勤めた兵器工場では、鋳造品を大量生産しなければなりません。鉄を溶かすキューボラも、それに不可欠の耐火煉瓦もありません。鋳造職場のベテランたちは、麓の関東軍将校宿舎に目をつけました。将校たちの家族がいち早く特別列車で逃げたあとの宿舎は、窓枠まで無くなっていましたが、

ペチカはそのまま残っていたので、それを壊して耐火煉瓦を一枚ずつ取り出し、毎日モッコで丘の上の工場まで運び上げるのが私たちの日課でしたが、とうとう完成させました。さらに、不足していたいろいろな道具や工具なども、手作りしました。職人気質が、このような成果になって示されました。

この実績を評価した上で、中国共産党は次のような政策を定めました。「留用」の日本人は捕虜ではなくわれわれの友人である。政治面では日

本軍国主義者と明確に区別し、一視同仁にあつかう。仕事の面ではその技術を尊重し、努力を信頼する。生活面では同等に処遇し、可能な範囲で民族の習慣に配慮する」。この政策は、日本人のいるすべての職場で貫徹、実行されたと言っているように。

たしかに、仕事は厳しく、暮らしは苦しかったけれども、シベリアに抑留された元関東軍兵士が懲罰的な処遇を受けたのとは異なり、中国人の同僚と同じ仕事をし同様に処遇されましたから、不満が高じるわけありませんでした。

5. 思想の変化の理由

そのうち、日本人の考え方にも変化が出てきました。その理由は、次の3点によるものと思います。

①内戦の戦局の推移——守勢から全国解放へ

1947年春、共産党の本拠地だった延安が国民党に占領されたと聞いたとき、われわれは「もうダメだ、いよいよシベリアまで追い払われていくのか」と本気で心配したのですが、共産党の幹部は平然として、「心配ない。国民党軍が持っている米国製兵器をわれわれが奪って、

やがて全国を解放するのだ」と言うのです。まるで夢物語を聞いているようでしたが、果たせるかな、1年半後の1948年秋には全東北が解放され、そのまた1年後には中華人民共和国が建国するという、まるで歴史の回り舞台が音をたてて回っているような時代を迎えました。

「なんで予言が的中したのか？」ひとつは中国共産党の主張を勉強してみよう、という気にもなってきたわけです。

②中国人とのわだかまりが解消し、連帯感が生まれる

初期のころは、お互いにわだかまりがありました。中国人からすると、「あいづら、わが国に来ていばりくさって」という憎しみと反感がありましたし、日本人の側にはいわゆる「チャンコロ」だという優越感、相手を見下す意識があったのですが、同じオンドルに寝泊まりし同じ釜のメシを食ううち、わだかまりが融け、仲間意識が生まれてきました。感動的な事例がたくさんあります。

たとえば、日本人の医師と結婚した看護師が出産しましたが乳が出ないので、農村の乳母を頼んだのですが、風呂に入らないから汚れています。それをお母さんが嫌って、必ず脱脂綿で拭いてから乳を飲ませていました。ところがいよいよ

駐屯地を離れるとき、その乳母が赤ちゃんを抱いて大泣きしたのです。お母さんももらい泣きました。お母さんはそれまで、中国の農婦は汚いとばかり思っていたけれども、心はこんなに綺麗な人だったのだという、一つの発見、反省がありました。

③しかし、私を見るところ、当時の中国共産党の幹部がすばらしかったことが、「留用」日本人の考え方を変える決め手になりました。「為人民服務（人民に奉仕する）」というのは決してお題目ではなく、幹部たちの毎日の言動そのものでした。

あのころ、直属上司から3日にあげず「何か困ったことはありませんか」と聞かれなかった人は、いなかったでしょう。

たとえば、中国人の同僚から「日本鬼子」と言われカッとなって殴った例は、私を含めて少なくなりましたが、私の場合は「君は修養が足りないね」だけでお咎めなしでしたし、解放軍にいた友人の場合は、上司がみんなの前で「殴るのはよくない」と本人を批判した後、本人だけ呼んで「部下に対する私の教育が足りなかったから、君に不愉快な思いをさせて申しわけない」と謝ったそうです。

解放軍にいた看護師たちが華北のある村で休息した時、一人のお婆さんが彼女

たちの身元を知ってから、食事を持ってきたのでたいらげたところ、その食器が綺麗に洗ってあるとはいえ「おまる」だったことが判明しました。お婆さんの夫と息子が日本軍に殺されており、日本兵には恨み骨髄だったので、彼女たちが日本人と知ると、このような「報復」を思いついたのでした。この事件を知った指導者は出発を取りやめて大会を開き、1時間にわたり懇切丁寧に道理を説いて聞かせました。日本人の看護師たちも、軍国主義の罪悪のひどさを痛感するとともに、中国共産党の政策をいっそう深く認識できたと言います。看護師たちにとって、「おまる事件」は骨身にしみて忘れられない出来事になりました。

「こんなに素晴らしい人たちが命がけで取り組んでいる事業に、私たちも協力しよう」日本人の多くがごく自然に、そんな気になりました。人生、意気に感ず。思えば、あ



1994年9月28日、かつて第29後方医院（現解放軍第304医院）で働いた日中の医療関係者が一堂に会した（『友誼鑄春秋』新華出版社、2002年刊より転載）

のころは中国共産党が最も輝いていた時期だった、と言えらるのではないのでしょうか。

6. 貢献の事例

「職人気質で仕事に取り組む」から「仕事の意義を理解して取り組む」へ。この変化が、表彰者の続出となって表れました。

北京で刊行された『第四野戦軍衛生工作史』には、日本人医師と看護師たちの事例が20ページにわたって紹介されています。国民党軍機の爆撃を受けながら手術を遂行した医師、輸血が必要な負傷兵を看護しながら「私はO型だから、私の血を採ってください」と叫んだ看護師等々、日本人医



1978年12月2日、東北有色（非鉄）金属管理局に勤務した留用技術専門家たちが、来日した李華・元局長を歓迎した

療要員の8割が表彰されています。航空学校では、機材も燃料も不足する中、しかも4年間に5回も移転しながら、林部隊のメンバーがパイロットと地上要員の養成に心血をそそぎました。ここで巣立った中国人パイロットは、朝鮮戦争のときソ連のジェット機を操縦して米軍機と渡

り合い、戦闘英雄を輩出しました。私が2005年に『新中国に貢献した日本人たち』中国語版の第二巻出版記念会に招かれたとき、戦闘英雄の一人、王海・元空軍司令官が林弥一郎氏を偲ぶ挨拶をされましたが、心のこもったお話を聞いているうち胸が熱くなりました。鉄道分野では、天水から蘭州までの幹線敷設という難工事に、300人の日本人も参加しましたが、この詳細は『善隣』6月号の「読んでみました」の拙文をご覧ください。

工業分野では、それぞれの管理局と工場・鉱山で、まず復興、ついで増産に努めたわけですが、後には専門ごとの後継者育成に力が注がれました。そして第一次五か年計画が始まった1953年、後継者たちが続々と北京の管理部門や各地の現場へ移っていきました。東北の工業は人材育成の学校にもなったのです。

映画制作所は、内戦の最中から『民主東北』という記録映画シリーズを制作し、建国後は『白毛女』などの劇映画を制作しましたが、その撮影・編集などの技術部門でも日本人が働きました。

ここで、二人の方について話すことにします。

一人は戸井田三郎さん。中央大学在学中に召集されて、関東軍で衛生兵になりました。敗戦後、解放軍の病院で働くなり、内科と外科に精通し、医療主任にまでなりました。帰国後は清瀬一郎代議士の秘書を務めた後、自民党から衆議院議員に7回当選、海部内閣で厚生大臣に就任、村山内閣では首相特別補佐の要職についています。「留用者」の「出世頭」と言えますが、生前は中国との交流に力を尽くされました。

もう一人は稗田憲太郎さん。元満州医科大学教授で、張家口で八路军と出会い、

ベチューン医科大学に勤務し、張家口を撤退してからは、学生たちと共に移動しながら宿営地で授業をつづけました。後に共産党総書記を務めた胡耀邦が病気になるたときは治療にもあたりました。1983年に胡耀邦が来日したとき、稗田さんは他界されていましたが、奥さんと娘さん夫婦がレセプションに招かれ、お礼を言われています。

7. 「留用」日本人の管理

中華人民共和国の建国より一足早く、東北人民政府が設立されていますが、そこに「日本人管理委員会」が設置され、旧制一高を卒業した趙安博氏が主任を務めました。人民政府の下の工業部には「外籍科」が、衛生部と鉄道部には「民族科」がそれぞれ設けられて、延安から来た日本人幹部が科長を務めました。解放軍でも軍団ごとに「民族科」がありました。日本人の多い各職場には「民族幹事」が派遣されました。

日本語の『民主新聞』は1946年にチチハルで、ガリ版刷りで発行されましたが、瀋陽に移転した後は活版印刷になりました。部数は最高7000部だったと聞きます。中国と日本のニュースのほか、

「留用」職場の経験交流の場にもなっていました。また月刊誌も発行されました。

瀋陽には各分野の日本人が数千人いましたし、管理委員会のお膝元でもあったので、文化娯楽活動も盛んでした。日本映画の『どっこい、おいらは生きています』や『箱根風雲録』が上映されましたし、自作の芝居や舞踊の発表会、ダンスパーティー、運動会もよく開かれました。野球もやりました。私がいいた職場には戦前の甲子園出場経験者がいたので、工業部傘下の各管理局の有志がチームを作り、瀋陽の公安部隊や民主新聞社の職員チームとよく対戦していました。

建国直後の1950年初頭から、日本との文通ができるようになり、私も両親の死亡や自分の近況を郷里の兄たちに知らせることができました。特記すべきこととして、日本へ送金ができるようになったことが挙げられます。日本に残した家族へ給料の一部を送金できることは、単身赴任の人たちにとり朗報でしたし、私と同僚も新潟県の夫人宛てに送金を続けたので、近所の奥さんたちに「ご主人は中国で、よほど立派なお仕事をされているのですね」と言われていたそうです。建国直後の外貨が貴重だった時代のこと、本当によくやってくれたと思います。

8. 帰国後の「留用」日本人

「留用」された日本人は、1953年から58年にかけて、21回に分かれて帰国しました。中国敵視政策がまかり通っていた時代でしたから、まず直面したのは就職難でした。「中共帰り」だ、「アカの手先」などと言われ、白眼視されたので、元の会社に復職した人はごく少数でしたし、技術や技能を發揮できる職場もなかなか見つからず、苦労を重ねました。

それだけではありません。公安調査庁や警察がつきまとうのです。私のような若輩の所にも何回か来てあれこれ質問するので、会社の上司から「仕事に差し支えて迷惑だ」と言ってもらい、やっと来なくなりしました。ある友人は料亭に招かれ「困ったことがあったら、いつでも相談に乗るから」と菓子折りをくれたので、ピンときたからその場で広げたところ、札束が出てきたそうです。

そんな時、日本人はすぐ仲間同士の「会」を作るのです。前述の鉄道関係者は帰国した翌年、「天水会」を立ち上げて、近況を紹介しあい励ましあったり、もう60年以上になりますが、二世が引き継いで分厚い会報を今も発行しつづけて

います。また毎年中国の国慶節に集い、餃子を作って食べながら、当時の思い出を語り合い、中国の同僚を偲んだグループがいくつもあったことを知っています。私自身もいくつかの「会」に参加していましたが、亡くなったり寝たきりになったりする人が増えたので、最近は「ご無沙汰」になってしまいました。

さて、「留用」という史実が広く知られることなく、長期間埋もれていた理由は何でしょうか。これは日中双方に原因があります。

日本側では、先ほど述べたように、「中共帰り」というだけで白眼視される時代がつづきましたから、それを進んで知らせ紹介することははばかれました。みんな歳をとり、自分の歴史を書き残しておこう、という気になったのは1980年代になってからであり、元朝日新聞記者の古川万太郎さんが『凍てつく大地の歌』という書名で初めて「留用」日本人を取り上げたのが1984年ですが、取材に苦労したと「あとがき」に書いています。

中国側についていえば、ご承知のとおり政治運動が相つぎ、特に文化大革命の期間には外国人との私的な交流などご法度でしたから、それまで細々と続いでい

た個人的な文通がピタリと止まりましたし、当時われわれと一緒に撮った写真もすべて焼却する有様でした（私は後日そのことを知り、複製してさし上げ喜ばれました）。

中国が改革開放期に入ってから、事態が一変しました。そこで1977年10月、「留用」経験者による中国帰国者友好会が結成され、中国再訪が始まりました。かつて勤務した解放軍の病院へ、航空学校へ、鶴崗炭鉱へ、天水へ。中には「回娘家（里帰り）訪中団」と名付けたグループもありましたが、いずれも大歓迎され、かつての上司や同僚と感激の再会を果たしました。中国からも大勢来日しました。私のいた東北有色金属管理局の李華局長が冶金工業部の副部长（次官）になり来日した時、同局で働いた技術専門家たちに呼びかけて歓迎会を開いたら、高齢者は杖をつきながら駆けつけ、物故者の遺族も当時ヨチヨチ歩きだった子どもと共に出席しました。

中国帰国者友好会はその後、高齢化する帰国者だけを対象とした組織体では「子子孫孫にわたる友好」の展望が開けないとして、会の趣旨に賛同するすべての人に門戸を開き、日中平和友好会と改称して、あまたの友好団体の中でも特異

な存在になっています。「留用」日本人は総じて親中派であり、この点、シベリア帰りとは対照的です。

むすび

「留用」日本人が果たした役割とその意義について、日中双方の要人が次のように概括しています。

まず、周恩来総理が1954年10月11日に、日本国会議員訪中団および日本学術文化訪中団と会見した際の談話です。

「日本が降伏した後、中国の東北で中日両国の人々の間に友情が芽生えました。一部の日本軍人と居留民が中国に残り、医師、看護婦、技術者、教員として中国の同僚とともに働きました。昨日まで敵だったのが、今日は友人になったのです。日本の多くの友人がrippな仕事でわれわれを援助していただいたことに、たいへん感謝しています。

かつて戦火を交えたものが、武器を捨ててともに働き、しかも互いに信頼しあったのです。多くの中国人が負傷したとき、日本の医師に手術してもらい、病気になったとき、日本の看護婦に看護してもらいました。信頼していたからです。工場でも、中国人は日本の技術者を信頼し、いっ

しよに機械を動かしました。科学研究機関でも、中国の科学者は日本の科学者の研究成果を信頼しました。

これが友誼であり、ほんとうの友誼、たしかな友誼といえましょう。これこそが、われわれの友好の種子なのです」

——中国の指導者たちは、日本国民と子孫孫にわたる友好関係を築くことの必要性和重要性については、夙に認識していました。が、「留用」日本人の事績により、その可能性が実証された喜びが、この談話から伝わってきます。

次は、後藤田正晴・元副総理が、拙訳『新中国に貢献した日本人たち』『同・続編』に寄せた推薦の言葉です。この本は、中国の中日関係史学会が「留用」日本人の事績を記録に残すことを決議し、取材チームが4回来日して2冊にまとめ上げ出版、その日本語版として刊行されたものです。

「埋もれていた史実が初めて発掘された。日中両国の無名の人々が苦しみと喜びを共にする中で、友情を育み信頼関係を築き上げた無数の事績こそ、まさに友好の原点といえよう。登場人物たちの高い志と壮絶な生きざまは、今の時代に生きる私たちへの叱咤激励でもある」(2

003年)

「この本に登場する人々は、戦争で破壊された日中両国の友好を、自らの汗と血で修復して、今日の礎を築かれた。両国関係が厳しい状況にあるとき、地道な草の根交流という原点に立ち返るよう、本書の人々は呼びかけている」(2005年。これが後藤田先生の絶筆になりました)

ここに、「留用」日本人の事績とその今日にも生きる意義が、みごとに概括されていると言えましょう。

(2015年7月9日・公開フォーラム)

講師略歴(たけよし じろう)

1932年生まれ。

1958年、中国から帰国。日本国際貿易促進協会常務理事、摂南大学教授を歴任

現在、日本国際貿易促進協会相談役 一般社団法人中国研究所顧問

著書『変わる中国、変わらぬ中国』(東方書店)『新版・現代中国30章』(共著、大修館書店)ほか多数

訳書『新中国に貢献した日本人たち』『同・続編』(日本僑報社)『孫平化・中日友好随想録』(上・下)(日本経済新聞出版社)ほか多数